
真昼の月

江川なつる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真昼の月

【Zマーク】

N7760M

【作者名】

江川なつる

【あらすじ】

ある夏の日。

少女はお気に入りの場所で昼寝をする。

目が覚めたとき、新しい出会いが待っていた。

夏の匂いは少しだけ切なくて。

それはきっと重なる想いが多いから。

序章（前書き）

オリジナルを書き始めて、まだ口が浅いですが頑張ります。
どうしても趣味で女の子が多くなつてしましました。
女の子しか基本出てこない話ですがよろしくお願ひします。

白い月が浮ぶ。

目が眩むほど青い空に、まるい月が。

昼と夜とが一緒になつたような光景に少し変な感じがした。

がちゃんとした音がして私は乱暴に自転車を止めた。

雲ひとつない空は真っ青すぎて、浮ぶ月を妙に目立たせた。

暑い。

汗が何もしていなくても流れしていく。

生い茂る木々のおかげで薄暗いこの場所でさえこの有様なのだから、ここまで道中を歩いていたら私は干からびていたかもしない。

そんなことを割りと本気で考えていた。

友人からの誘いは断つた。こんな田舎だ。行く場所など決まっている。

毎日、顔を出しているに近い場所をブラブラするのはそれなりに楽しい。小さい頃からずっと住んできた町だし、住んでいる人も見慣れた顔ばかりだ。

楽しいことは楽しい。でも飽きる。同じ仲間とつむのも乐じやない。

何となく伸ばしていた髪の毛が汗で張り付く。

鬱陶しく制服の襟から入り込んだ僅かに茶色い地毛を外に出す。この髪のことは基本的に気に入っている。量も多いし、巻くにしても結うにしても適当にするだけである程度形になつてくれるから

だ。

逆に学校では教師に田を付けられるし、面倒くさい先輩が睨んで
きたりもするが切る事はしなかった。

負けた気がして悔しいからだ。

だがそんな風にして守つたわりに夏の暑い日は邪魔でしじょうがな
く思える。

「うざい……」

はあと結構大きなため息が出た。

夏の暑さを助長するような蝉の声が周囲から際限なく響いていた。
暫く来ていなかつたから伸び放題の草を蹴つて踏んでと繰り返し
ながら進む。

目当ての場所は遠くないが急ぐような用事でも無いので適当に道
を外れてみたりしてみる。途中で虫が飛んできたり、姿が見えない
のにがさがさと草を搔き分け逃げる音がした。

ザアツ

風が、吹きぬけた。

舞う草達に少しだけ田を細める。

視界が一瞬で開け草の緑に、空の蒼、雲の白、そして太陽の光が
そこには溢れていた。

小さく息を吸う。強い風につんと夏の匂いがした。

「ここに来るの、久しぶりかも」

私の目当ては何も変わらず、そこに佇んでいた。

何てことはない樹だ。種類なんて知らない上に知る気も起きない。
ただ私が小さい頃からこの樹はここにあって、一人になりたいと

きには使わせてもらつていいだけなのだ。秘密基地なんて高校生にもなつて言つたら笑われるかもしれない。

それでも感覚的にはそれが一番近かつた。

「さあて」

ぱんぱんと私は掌を軽く叩いた。

格好は制服のままだが氣にするほどでも無い。

普通に履いていたとしても中が見える可能性のあるスカートの下には既に“見せパン”という対策が施されている。

ましてや、この周りには人がいないのだから見る人も居ないだろう。

見たら殴るけどね。

そんなことを心の中で呟きつつ、一番下の枝に手をかける。ぐつと力を込めれば直ぐに慣れた動作で体が動いた。

「ふー、良きかな、良きかな」

お気に入りのポジションまで上つて枝に腰掛ける。

太い枝は私が一人乗った程度ではびくともしなかった。

しつかりと持つてきていた布を木の枝に敷く。素肌で木の上に座つたり寝たりすると幹のでこぼこした所などにひつかけてしまつていつの間にか擦り傷ができたりするのだ。

特にこの季節は制服も半袖になつて触れる場所も多くなる。目立たない所ならばまだいいが見えやすい所に傷が着くのは女子高生として遠慮したかつた。

少しわざと揺れるように体重を移動させてみる。それでも枝はほとんど揺れない。

何となく嬉しくなつて、私は口の端を緩めた。

ま、昼寝もするし。当然か。

この安定感があるから寝ることもできる。

寝相には自信があるし、何よりここは風の通り道らしく涼しい。
落ちた所で怪我をするような高さでもない上、下は草のおかげで
フカフカだ。

それに人間体勢が崩れそうになると起きるものである。授業中に
舟を漕いでいても完璧に机に伏せそうなると田が覚める。
結局はそういうものだ。

取り留めの無いことを考えながら私は田を瞑った。
何となく見上げた空には丸い昼の月が浮んでいる。
重なる枝葉の間から青い空と白い月が見え隠れする　綺麗な光景
だった。

肌を滑る風に田を細める。今日もいい風がこの場所には吹いていた。

(1)

トサ

これは私が草の上に落ちた音。
別に体重が軽いことを自慢しているわけではない。
むしろ身長があるせいでクラスの中ではきっと重い方に振り分けられる。

そんな私が“トサ”なんて軽い音で済んだのは、木の下に生える夏草の生命力が強靱だつたおかげに他ならない。

埋もれたような上体のせいで目前に揺れる草の薄緑に私はありがとうと小さく呟いた。

「あ、あのっ、大丈夫ですか？」
「んー？」

そんな風に現実逃避をしていても仕方ない。

私はまさか本当に落ちるとは思わなかつた枝を見上げながら浸つていた私の耳に少し離れた場所から声が聞こえてきた。

身体の何処も痛くはないし、寝起きで起き上がるのが面倒だつた。それだけの理由で草の上に寝転んだままだつたのだけれど人がいるなら起きなければならぬ。どうやら心配してくれているようだし、と私は身体を起こした。

丈の高い草は座っている私の肩くらいまでは余裕で高さがある。時々擦るように肌に触れてくすぐつたい。

「大丈夫だけど」

痛みが無いから平気だとは思いつつ自分の身体を見渡す。所々に千切れた草が着いてしまって、制服から払うのが面倒くさそうだった。それ以外は特に目立った外傷は無い。夏草は良く切れから切り傷の一つや二つは覚悟していたのだがそれも私の杞憂だつたようだ。

「木の上から落ちたんですよ、大丈夫なわけ……」「あるのよね、これが」

のんびりと立ち上がって草を払う。私が手を動かすたびに落ちていく縁は見ていて少し面白かった。ざざざざざと重いものを焼き分ける音を出しながら声の主が近づいてくる。

そこ道じゃないから、通りにくいのに。

随分大変な道を選ぶ人だと思つけど、心配そうな表情に言葉を呑む。

そつちの方が通りやすいなんて心配で頭が一杯の人間に言った所で聞いてくれないだろう。大体にしてもう距離も然程無くなつてしまっていた。

ここによく来る人でなければ草の濃い薄いなんて分からぬのだ。私くらいしか来る人はいないし、つまり道なんて言つているのも私だけということだ。

「心配してくれてありがと」

近づいた人影にできるだけ笑顔を心がける。
友達から素の時の表情が無に近すぎて取つ付きにくいなんて忠告を受けたこともある。

それからはなるべく人と接する時は笑顔を、というか感情を顔に出すようにしている。これが中々面倒くさくて、時々私がここに息抜きに来る理由の一つかもしれない。

「いえ、あの……本当に大丈夫ですか？」

「うん。気にしないで」

心配そうにこちらを見てくる。

そんな顔されても、困るんだけど。

私としては怪我も無いしちょっと失敗したくらいの気持ちなのだ。
きっとこれからも時々はこの場所に来て、落ちた木によじ登つて昼寝するのだから。

風がまた吹いてむき出しの足を草がちくちくと刺激する。
寝ている時は余り感じなかつたが元々この辺の草は先端が尖つ
ていて少し痛い。

立つたことで丁度良く草の高さとスカートから出ている足の部分
が当たるようになつたらしい。

「あなたはどうしたの？こんな所で」

パツと見た姿は制服だった。

見たことがある。とこりこの街に一つしかない中学校の制服
だ。

私が通っていた学校とは違うから必然的にもう一つの中学校のものになる。

そして中学生という事は年下という事も流れで決定される。

長い黒髪は私とは対照的な清楚さとでもいうものを醸し出して、草の合間から見た第一印象はそのままお嬢様だった。見知らず

の人を心配するあたり性格的にも擦れていなくて素直で真っ直ぐな粉のだろう。

初対面の人に何をあれこれ考へているのか自分でも良く分からなかつた。

言わせて貰えばそういうものを一瞬で思えるほどに容姿を彼女はしていたということだ。

「わた、しは
ん？」

トーンの下がった声に私より下にある顔を覗き込む。

真っ直ぐな髪はサラサラとしていて風に僅かに揺れる。その度に長い睫に縁取りされた瞳が隠されて彼女の表情を分かり辛くなつてしまふ。

何処からどこまでも私と対照的な雰囲気を持つ子だった。

ほろつ

擬音にすればそんな感じ。

私は彼女の瞳から涙が生成されて丸い珠となり白い頬を滑り落ちるのを見ていた。

びっくりはしていた。それはもう、言葉に表せないくらいに。きっと今の私の表情を俯瞰カメラで取つて友人達に見せれば、「あんたも驚けるんだね！」と逆に驚いてもらえるくらいには驚いていた。

だつてこれは完璧に私が泣かせた、ということになる。

今この場所に居るのは私と彼女だけで、彼女が泣いたのは私が話しかけた瞬間で、その二つの事実だけ証拠には充分だろう。

「と、とりあえず、座る？」

珍しく噛んでしまった。私の動揺具合をよく表している。

私が寝ていた枝に敷いていた布を取りうと上を見るもそこには何もなく、ただ太い木の枝が悠々と若葉を伸ばしているだけだった。あれ、と首を傾げるもない物は仕方ない。

きつと木から落ちたときに一緒に落ちたのだろう。だからといって足元が見え辛いくらい茫々の草むらを探す時間は無い。

少しでも落ち着くように布の上に座らせてあげたかったのだ。ちなみに私は普段から気にせず地面に座る。だが見るからにお嬢様である彼女がそれをするかは全く別の話である。しかしここは諦めて座つてもらうしかないだろう。

「はい」

蚊の鳴くような声で彼女は答えた。

返事が来たことにとりあえずほっとした私は氣休め代わりに地面を掃いて促した。

しずしずと頷き綺麗に足を置んで座る隣に私も腰を下ろす。やつぱり草がちくちくと刺さった。

「へえ、莉子のお父さんは転勤族なんだ?」

とりあえず泣き止んでもらつた彼女に私はできるだけ優しい声で話を続ける。

気分的には子守だ。聞いた所、莉子の年は三つ下だった。弟と同い年という事もあってか、何となく放つておけなかつた。

手渡しはハンカチはまだ彼女の手の中に収まつている。

よれよれのそれはポケットに入れっぱなしになつていた。恐らく、いつだか母親に無理やりに近い形で持たされた奴でお嬢様っぽい莉子が持つとともに違和感があつた。

こういう子はきっと毎日きちんと糊付けされたハンカチを持つて学校に行くのだろう。私の勝手な想像だけどその姿はとても似合つてゐる気がした。

「はい。今日もまた転勤が決まつたって」

「この街を離れるのね」

「ここにはお父さんの実家があるから、もう転勤しないのかと思つてんですけど」

焦つてもいなくて、泣いてもいない莉子の声はとても落ち着いていた。

少なくとも私の友達にはこういう喋り方が出来る子はいない。とても聞きやすくて滑り込んでくる話し方はまるで訓練してきた台本を話しているみたいだつた。

私が受けた感想としては放送部の子が教科書を読んでいるときによ

近い。

聞き取りやすくして、抑揚があつて、上手くして、そして眠くなる。

「転勤するって聞いて悲しくなった、と」

「……えりです。すみません、いきなり失礼な姿をお見せしまして」

頭を深く下げる彼女に少しだけおかしくなる。

転勤が悲しくて泣くことが失礼なら、木の上で寝ていながら落ちて心配を掛けた自分が余程失礼な気がした。比べるのが間違っている。

転勤が悲しいのはその場所が好きだからだ。

それには少しも失礼なことなど含まれていないと私は思つ。

「いや、別にいいのよ」

手を振つて否定する。どうにも莉子は素直すぎる。
今まで付き合つたことの無い人種に私は少しだけどうしたら良いか分からなくなつた。

彼女の顔を見ればまだ僅かであるが泣いたことが分かる。目は赤くなつていたし、瞼も少しだけ腫れぼつた。とりあえず莉子の手からハンカチを取つて涙の後だけ拭う。

少しだけ驚いた顔をされて私はとりあえず微笑んでおいた。

「どうか、行こつか」

「え？」

ぽかんと口を開けて固まる。何を言われたか理解していない顔だつた。

予想通りの反応に私は胸の中に風が差し込んだように気分が良くなつた。

とりあえず彼女に事情を理解させようと余り回転が良いとは言えない頭を働かせる。言葉を選ぶというのは難しい作業だ。自分の言いたいことをきちんと伝えられたかなんて確認もできない上に伝わった所で後から変わってしまうことが多い。

気心の知れた友人ならいざ知らず、初対面の年下相手に使うべき言葉を私は知らなかつた。

悲しいことに後輩に慕われる性質たちでもないので学校での経験値もゼロに等しい。

「夏休み中に転勤しちゃうんでしょ？」

「はい」

風に木がざわめく。同時に夏草もそよいで素肌を刺激した。

そういえば、と下げた視界に自分とは比べ物にならないきちんとした丈のスカートが見える。

さつきから感じていたのだが莉子はどうにもお嬢様という形容詞の上に真面目なという文字がつくようである。

「なら、その前に思い出作らなきや」

「え、ええ？」

「ほら。こっち」

まだ戸惑った顔をしている彼女の手を握つて引っ張る。

ここに来るのが初めてだつた彼女とは違い、私は通いなれている。歩きやすい道を選んで自転車の元に戻ることなど朝飯前だつた。木の所に行つた時間の半分ちょっとだらうか。

それくらいの時間で私はきちんとした道へと戻つてきていた。

「あれ？」

戻ってきたもののそこは何もなかつた。

相変わらず舗装される気配も無い砂利道に、この頃の暑さですっかり干上がった水溜りの底がひび割れていて物悲しい。踏んだ所で泥の感覚もなく砂埃が舞うのは分かつてはいたので自転車でも、たまの歩きでも避けることにしていた。

そこまで細々と見てみたところでなくなつたものが見つかるわけでもない。むしろこの殺風景な場所で自転車という大きなものが見つからない時点で無いのだ。

分かりきっていた現実に納得した所で、隣を歩いていた莉子が不思議そうな顔で私を見る。

「どうしました？」

「どうもいつも自転車が無い。 だがそんな事私以外知るわけがないので黙つておく。

そう大したことではないものの隠すほどのことにも思えなくて素直に口に出した。

「自転車がなくて、ね」

「大変じゃないですかっ」

「こんな所に鍵掛けないで置いておいたのが悪いもの」

人も通らない場所だから油断していた。

だが街中でこれをすれば鍵も掛けずに放つて置いた方にも責任はあることになる。

慌てた様子で周囲を見回す莉子を見ながら髪の毛を弄る。長いそれは指の先でくるくると回つていて。どうしようかと少ししだけ考えて、脳裏に描いていたルートを改竄する。

自転車については気にしない。

明日は幸い休みの日だし、その間に買つなり借りるなりの手段を

講じることにする。

今至急なのは私の自転車とこれから登校についてではなくて、莉子をどうやって遊ばせるかというそれだけなのだ。

「ゲーセンは無理か……まあ、近所だしいいけど」

定番は諦めなければならないが思い出が作れないわけでもない。全然知らない場所だつたら困ってしまうかもしれないが幸いなことに熟知している。

ゲームセンター やカラオケがある市街地に徒歩で行く気にはなれなかつた。自転車も一台しかなかつたがそれはそれ、二人乗り（二ヶツ）という便利な手段がある。

莉子は見たところ軽そうだし問題ないはずだ。いかに体力に自信の無い私でも。

「そうなんですか？」

「そつ。昔ながらの街並みつて奴ならこじら辺の方がいいわよ」

莉子のまるい瞳に説明する。

田んぼに畠、神社に無駄に広い空き地。更には駄菓子屋なんてものも存在している。レトロな気分を満喫するにはある意味持つて来いの場所である。

喫茶店も一応なりともあるし時間を潰そうと思えば出来なく無いのだ。ただこの周辺に済む子供は高校生にもなると飽きたほどそれらを周っているので行動範囲が広がつてからは足が向かなくなる。それだけだ。

「それじゃ、行きましょうか？」

大体の予定を決める。

相変わらず刺さるほどの夏の口差しが肌に痛い。歩くと考えただけでくらりと視界が揺れ、早めの熱射病にでもかかつてしまつたようだつた。

隣を見る。

まだ涙の後はわかるけれど、私よりは余程スッキリした表情の莉子がいる。中学生はまだ元気に溢れているんだろうかと三つ下だつた彼女の顔を見ながら考えて、暗い考えになつてしまつそうだつたから打ち切る。

高校生はまだ若い。まだ若い。と頭の中で繰り返す。
友人から老け顔なんて言われた記憶は何処か遠い彼方に捨ててき
た。

「はい」

莉子がにこりと微笑む。

その顔はやはり自分にはない若さが輝いていて、私は少しだけ気落ちした。

暫く他愛も無い話をして乾いた道を歩いていた。

容赦なく照りつける日光に辟易しつつ時折莉子の様子を伺う。確認してはいなかつたが莉子は歩いてあの場所まで来ていたらしい。

“街を離れる前に少しでも多くのことを知りたかった。”

なんてことを言つていただがそれに対してもある程度の広さがあるこの街を徒步で回りつとすると私はだつたら思わない。凄いと同時に少し呆れる。

「おばあちゃん、お金ここに置いておくからね
「はいはー」

駄菓子屋さんの店内に入る。ひんやりとした独特の匂いが鼻腔をくすぐつた。

莉子は駄菓子屋さんに来たことがなかつたのかキヨロキヨロと周囲を見回してこる。

私は昔から良く食べていた駄菓子を見つけると迷わずそれを取つてお菓子や細々としたおもちゃ、くじに埋もれるように置かれている台へとお金を出した。

奥からお密の配達を感じておばあちゃんが出てくる。

ひやりん

小銭が触れ合つて金属の冷たい音が響く。

蝉の声がつるといくらに溢れていた道を歩いてきた分その静かな音はよく耳に残つた。

この店のおばさんも昔からの顔なじみだ。私が小さい頃から少しも変わつていなつように見える顔はそれでも白髪が増えただろうか。

実際に来るのは何時振りだらつと記憶を振り返つたりしてみたが遠すぎてハツキリしない。

「久しぶりだねえ。あたしゃ、中学生になつたばかりだと思つてたよ」

ちらりとこちらを見たおばちゃんが言つた。

この街に中学は一つしかない上、高校に至つては一つしかない。だからこの周囲の子供しか見ないおばちゃんでも制服で何処の学校かなんて容易に判断で来てしまひ。中等と高校の区別なんてもつと簡単だらう、と思つ。

時々隣の市の高校の制服を着ている人もいるが余り制服を覚えるのが得意で無い私でさえ小さい頃から三種類の制服を見て来たせいでもう見て直ぐに判断できる。

長年子供を見てきたおばちゃんにはもうと簡単なはずだ。

「いやだ、おばさん。私はもう高校生よ」

「そつみたいだね。いやー、時が過ぎるのは早いよ」

あつははと豪快に笑つおばさんを見て、愛想よく答える。

中学生の制服はもうとつぐに卒業した。まだ物忘れが酷くなる年とも思えないが、この頃の暑さを考えれば近所の子供の年くらい忘れる事もあるだらう。

莉子はまだ見慣れないお菓子たちにきょろきょろと視線を動かしている。

友達かい?といつおばさんの言葉に頷いて暫くその動きじつと見てみる。小動物のように端から端をすばしって動いていて、見ていて飽きない。

「そんなに珍しい?」

「はいー。」

そんなに力いっぱい頷かれてはそうとしか言えなくなってしまった。私にしてみればここにあるものは珍しく無い。いつも見てきたものだし、来ようと思えばいつでも来ることが出来る場所 そんな認識しかなかつた。

だからふらりと立ち寄ったに近い場所で莉子がそこまで喜ぶとも思つていなかつた。

「でも、ここだけじゃないんだから迷いすぎると時間がなくなるわよ」

「あ…… そうですね」

からかい半分で言つた言葉に彼女の表情が少し沈んだ。

失敗した。私は思わず顔を顰める。この街を離れるのが嫌だと泣いた少女に“時間がなくなる”は無神経だった。いつもなら常套文句である「また来よう」が使えるがそれでもできない。

できないからこそ彼女は泣いていたのだ。

知つていたくせに対応できない自分の迂闊さが嫌になる。こんなんだから友人にも鈍いとか何とか言われてしまうんだろうなあと思い、彼女に分からぬ程度に苦笑した。

「じゃあ、お勧め教えてください」

そんな私に気付いたのか、氣を遣つてくれたのか。それは分からぬ。

けれど莉子は顔を僅かに俯かせた私の顔を覗き込むようにして言った。その顔に浮ぶのは柔らかな微笑で先ほどの沈痛な面持ちは少しも見えなかつた。

大人っぽい子。そして優しい子。私はそんな風に思つた。

木の上から落ちるといつ迷惑すぎる初対面から今まで私は年下であるこの子に気を遣わせすぎだ。これではどっちが年上なのか分かつたものじゃない。

莉子はいい子だ。

優しい。気が回せる。この一つだけでも彼女は私ができない事をすんなりとこなしているといえる。理想的な性格といつものを具現化したらこの子が出てくるんじゃないだろうか そんな風に考えながら同時に少し心配になる。

「莉子は……」

「はい？」

出でやうになつた言葉を連れ戻す。

疲れない？

そんな事を言ひのはきつと彼女に對して失礼だ。
空氣読まない、読みにくいく嫌な定評がある私だがそれくらいは分かる。

可愛らしく首を傾げる彼女の顔を見て「いつん、何でもない」と誤魔化す。生ぬるい風が開きっぱなしの扉から吹き莉子の髪を揺らす。外を元気に走つていく子供たちの声が聞こえた。

「お勧めはね」

何をすればいいのか分からなくなつた私はとりあえず見慣れた棚たちを見回す。幸いな事に駄菓子屋にあるものは足繁く通つていた頃と余り変わつていない。

駄菓子の種類はそれほど増えることが無いのか、それとも人気のあるものが結局昔からあるものなのか。私には分からなかつたし、別にどちらでも構わなかつた。

でもこの時は代わり映えのしないラインナップに助かつたと思つ

たのだ。

駄菓子屋さんを出て道を歩く。

相変わらずの暑さだったが一番暑い時間帯は越えたようだつた。少しだけ太陽の光が優しくなつたような気がした。それでも流れる汗の鬱陶しさは同じで時折拭わなければならなかつた。

「楽しめた?」

「はい! 駄菓子屋さんって色々なものがあるんですね」

「まあ、 “何でこんなのが” つていうのも置いてるわね」

実際あの店には様々なものが置いてある。

駄菓子は勿論良く分からぬいアクセサリーやら子供が好きそうな玩具もあるのだ。アクセサリーの中には時々良いものもあって街に出る前はここで買つたりしたものだ。

今日だつて中々センスのいい指輪があつてこつそり莉子には内緒でこつそり買つてしまつた。財布の中身は限りなく薄くなつたが彼女の思い出作りに貢献できたと思えば良いだろう。この数時間の付き合いであるが彼女の人の良さは充分に実感できた。こんな良い子の為にこそお金は使われるべきである 少なくとも参考書よりは親に対する言い訳を考えつつ歩いていたら隣からくーと可愛い音が聞こえてきた。反射に近い動きで音の聞こえてきた方向、つまり莉子のほうを見る。

彼女の白い肌が赤くなつていた。色が白い分、その差は顕著で私は少しだけ笑つてしまう。

「一回休憩しましょうか?」

丁度良く次は喫茶店に行こうかと思つていた。店の並びを考えるとそれが一番効率よく町を回ることが出来るからだつた。とはいつてもそこを周つたら最早見せるものなどほとんど無い。

本屋さんなどはあるが懸々見せるほどの中のものは思えなかつた。

「お願ひします」

顔を紅くしながら頷く。俯かされた頭は身長の関係もあつて可憐らしい旋毛が見えた。

風が吹く。私の髪も莉子の髪も強いそれにはためいて、視界が塞がれてしまう。

一瞬のつむじ風。

風が凧いでそつと瞳を開ける。すると夏の空に昼寝する前に見た白い真昼の月が浮かんでいて、私は何だか不思議な気持ちになつた。

(4)

扉を開けるとちりんちりんと軽やかな音がした。

「ここに外れはないから好きなのを頼んで良いわ

窓際からメニューを取り莉子に渡す。

何回も着ている私は見るまでもなく、今売り出しているものをテーブルの上に置かれている別メニューから読み取る。相変わらず甘いものに力を入れている店だった。

季節にあつた甘味 カキ氷などはもちろん 定番のパフェから、お汁粉、果てはパイにアイスと女の子が喜びそうなものが列挙されている。そしてそのどれもが美味しいのを私は良く知っていた。調整された冷房が寒くも暑くも無い気温を保っている。高校の近くにある喫茶店やファミレスは冷房が効きすぎて寒くなってしまうがここならそんな事も無い。そういう細かい気配りなども含めて私はここが気に入つていて今でも度々訪れる理由であった。

「そりなんですか。でも、どれも美味しそうです」

笑顔で大きく頷く彼女。その姿に暗さは無い。

顔の前でメニューを広げあっちこっちに視線を動かす様は見ていて楽しかった。

しばらくその様子を観察しているとちらちらと私の方を見る。最初その動作が何を表しているか分からなかつた私は何度も目が合つた時、思わず首を傾げてしまった。

すると莉子は少しだけ照れたように頬を赤くしてから、一人で見ていたメニューを私にも見えるように差し出す。それから小さな声

で「一杯ありますぎて、決められません」と言った。

「ごによと籠る声は私が放送部の朗読のようと思つた口調とはかけ離れていた。でもそれが中学生という年相応に感じられて私は小さく噴出す。

薄い紅色が耳まで広がり真っ赤になつた。

それが更に可愛くて私は口元が緩んでいくのを感じた。

一頃り莉子の表情を堪能した後、私は拗ねてしまつたらしい彼女に「めんねと軽く謝りつつメニューの片方を支える。広がる名前はデザインに違いがあれど、予想していた通り私が記憶していたものと大差ない。

「そうね……甘いのは好き?」

甘いものが嫌いな女の子は少ない。莉子は見るからに甘いものが好きそうに見える。

そんなことを思いながらも一応の確認に彼女の顔を見る。かく言う私はも甘いものは好きでカフェというより喫茶店の雰囲気を持つこの店にも何回か来ている。

「大好きです！」

「なら、これとか良いんじゃないかしら」

思つていた通りの返事だつた。私は相槌を打つように頷いてから一つの名前を指差す。

私が時折無性に食べたくなるものだつた。

莉子も気に入るかは分からぬがそれでも彼女に食べて欲しいとは思う。自分の好きなものを人が気に入ってくれるのはとても嬉しい事だから。

「これが好きなんですか？」

私の指先の文字と私の顔を莉子の視線が往復する。

じつと見つめる顔は真剣そのもので、きっとこういう人のことを直向きな性格と呼ぶのだろうなと思わせる。しかしあ菓子選びにそこまで真剣な表情が出来てしまうあたりが彼女らしい たかが数時間で、という人もいるだろうが私は莉子のどういう行動が“彼女らしい”のか何となく分かる程度には彼女の事を知つたつもりでいた。

「そうね。私のお気に入りの一いつてところ」

「それにします」

「『リと微笑んだ私に彼女はほほ即答した。

きつと文字なんて見ていないし、それが何かも分かつていなかいのかしら？」

疑問が過ぎりもしたが莉子と田が合つた瞬間にそんなことは飛んでしまっていた。

彼女の瞳がとても、とても強くて真っ直ぐなものだったから。そこに含まれる真剣さに私は一瞬気圧されてしまったのだ。

“私のお気に入り” 彼女がこの言葉で即決した事は想像に難くない。

莉子は顔に出やすい。良くも悪くも分かつてきただことだった。

だからこの時表情に出た感情もきっと本物だったのだろう。

分かつていた。分かつていたからこそ、私はそれを受け止めきれずには気が付かない振りをするしかなかつたのだ。

「……じゃあ、マスター」

いつものように注文をする。莉子の手からメニューを受け取り、通いなれた私が両方を頼んだ。じつとその様子を見る視線を感じて頬に熱が昇つてしまつた。

注文してマスターの後姿を見送つてから場を誤魔化すために携帯電話を探す。こういう相手の顔を見られない時にあの文明の利器は大活躍だ。

いつも無造作に突っ込んでいるポケット　ない。
時折放り込む鞄の横　ない。

滅多に入れない場所も探す。流石にここまでないと焦りも出てくる。最悪の可能性として自転車の籠に入れていたかも知れないけれど最早自転車 자체がないのだ。

つまりは失くしたということになってしまった。

「どうしました？」

私が鞄やらポケットやらをひっくり返す勢いで探し始めたのだから、対面に座る莉子も当然様子の変化に気づく。顔を見づらいなど最早考えていられなかつた。

本末転倒もいいところだが事情が事情だ。仕方ないだろう。

携帯電話には色々な情報が詰まっている。そんなことは女子高校生の間では常識過ぎて誰も口にしない話題だ。命の次、下手すると同じくらい大切と言う子も少なく無い。流石にそこまで大切なわないがあの箱には大切な情報やら要らない情報をやらを矢鱈滅多に入れている。

生きていけないと大泣きする話でもないがもう一度全ての情報を習得することを考えると面倒くさすぎるため息を何度も生む事になつてしまつ。

「ケータイがない、みたい」

何だか前にもしたようなやり取りだとデジヤヴを感じながら私は言った。

注文したものが何も届いて無い状態で「どうべき」とではなかつた

かもしだれない。

それでもこちらを真つ直ぐに伺う視線に嘘はつけなくて、その上心配の表情が惜しげもなく表れていては誰もが陥落するといつものだ。

「け、けーたいですか?」

「うん」

「あの、携帯電話ですよね?」

「そうね」

莉子の視線がテーブル、窓の外、壁、天井と動く。それからもう一度私の元へ戻ってきて片方の指の先からもつ一方の方へと本当に一周する。

ここまで人に見られるという経験は中々ない。

それこそモデルでもしている人だつたら日常なかもしだれないが、生憎普通の人生を歩いてきた田舎の高校生にそんな経験をしている人物はかなり稀といえよう。

莉子は都会に行けば読者モデルとかなれそうだけど。

観察を仕返すように莉子の身体を見てみいると、幼いながら綺麗な顔立ちをしている。

今はまだ可愛いに近い容姿だが高校生になるくらい 私と同じ年になる三年後くらいには美人さんという言葉が似合う人物になつているだろう。彼女の持つお嬢様な雰囲気もそれに拍車をかけていて、同じ年だつたら声をかけるのを躊躇つたかもしだれない。

なんてつらつらと考えていたがそろそろ時間切れのようだ。

目の前で莉子の口が何回か開閉する。音はない。ただ私に何かを伝えようと動くだけだ。

その動きが何度も続いた後、やつと声が追いついてきた。

「探しにいかないんですか?」

「探しに行くわよ?」

私の言葉に莉子は直ぐに腰を上げた。今にでも飛び出してこきそうな雰囲気だ。

「何してるのよ」

「え、何って探しに……」

それを間一髪、莉子の腕を掴む事で押し留める。

私だって探しに行きたい気持ちは当然ある。自分自身の持ち物だし、責任から言っても私が探すのが筋だろう。大体この子は私の携帯電話を見たことも無いはずだ。見たことがない物を探せるとすれば超能力者に他ならない。

私はふうと小さく息を吐いた。

「お腹が空いてちゃ見つかるものも見つからないわけ

暑い中をここまで来たのだ。そして探す道程は今までの道のりを帰ることになるから同じ距離、下手したらそれ以上に歩く事になる。お腹が減つていてる女の子にその道のりは過酷だ。落とした本人である私でさえ嫌なのだから関係の無い彼女を伴つて探すというのは罪悪感が募る。

よつて、今何も食べずにここを出るという選択肢はない。

気持ちとしては飛び出したいがそれは莉子にもマスターにも申し訳なさすぎる。

「ほひ、座つて?」

莉子の視線と表情が動く。それを私は有無を言わせない笑顔で座らせた。

私のそう意識した笑顔は中々怖いらしい。笑顔が怖いってどれだけ思いもしたが時折役に立つので気にしない……しないことにしたい。

「あなたが、そいつ言つなら」

その効果が出たのか、はたまた莉子が素直だからなのか。
どちらかは分からぬが莉子は椅子に座りなおしてくれた。丁度
良く、頼んでいたものが運ばれてくる。未だ不満そうな顔をしてい
る彼女を宥めながら私はそれに手を伸ばした。

*

(5)

「それで、どうこの何ですか？」

色とか形とか……と尋ねる莉子の言葉に私は頬に手を当てた。

言うべき特徴はさしてない。色は良くある白だし、形も一般的な折りたたみ式である。ストラップもよく失くすという理由で余りつけない上に「コレーション」をしてくるわけでもない。

そういう変哲の無い携帯電話をどう説明すればいいのか少し困つてしまつたのだ。

「E-T-Y-Oの、Pシリー^{エチヲ}ズなんだけど」

「あー、可愛さ（カーディテイ）を売りにしたシリーズですよね」「やつやつ」

機種としては然程珍しいものでもない。

むしろ何年か前まではほとんどの女子高生はこのシリーズを使っていた。それはやはり売りになつていていた可愛さと同時にカメラやメルなどの女子高生が欲しがる機能が一番合つていたからだ。難しそう、操作しやすい。

そんな理由で数年前までは大流行していたのだが、他社のものやそれぞれ多極化するニーズに合わせて色々なシリーズが増えた今使用者は三分の一くらいに止まっている。

「そういえば莉子はケータイ何使つてるの？」

「私はt^{タビオ}a p^{アピオ}i oです」

私の言葉に莉子はポケットから一つの箱を取り出した。長方形の

それは言つまでもなく携帯電話で、黒の鈍い光沢が新品ではない事を示してゐる。

t a p.1.0も携帯電話の会社としては大手である。私の使つE-T-YHとは市場を一分していふと言つていい。この頃は他にも色々なものがあるらしいのだが、そこまでそういう事情に詳しく無い私にとっては携帯電話の会社で出るのは「」の「」の名前くらいだ。

「へー、それなんだ?」

「はい」

少し恥ずかしかつた表情はきっとその機種が揮いという事を自覚しているからだらう。私の曖昧な記憶では莉子の持つものは4年ほど前のものだ。一年に一回は新機種が出る現在そこまで古い方を持つ人物は少ない。少なくとも私は見たことがなかつた。

「物持ちがいいのね」

「そう、ですか?」

「ええ」

莉子が不思議そうに首を傾げる。

この時もう少し詳しく話をしていたら、なんてそんな考えが後になつて出てくるなんて私は少しも思つていなかつた。

「ないねー」

「ないですな……」

「となるとやつぱり、あそこかあ」

莉子と出会つた場所。夏草が生い茂つて地面が見えなくなつているあの場所。

そこしか考えられなかつた。

携帯電話が無いことに気付いた喫茶店から歩いてきた道を辿つてきたが何処にも携帯電話らしきものは無かつた。もちろん駄菓子屋のおばちゃんにも落ちていなかつたか聞いたし、念を入れて交番に届けられていない今まで聞きに行つた。

しかし答えは見ていない、届けられていないの一点張りでとりあえず一番落ちていそうな場所に私と莉子は足を伸ばして行つた。考えてみれば私は木から落ちたんだし、その時地面に落ちていたとしても何の不思議も無いのだ。

「探すのは大変そうね」

「手伝いますから。頑張りましょ」

莉子の微笑みに私は力なく頷いた。

はつきり言つてまたあそこまで戻つてから移動するのは面倒くさい。

しかし自分の不注意が起こした事だと考えればまだ諦めもついた。とぼとぼと歩く私の隣で莉子は心配そうな、それでいて嬉しそう、という複雑な表情を浮かべながら足を進めていた。

「のんびり戻りましょ」

「はーい」

ふわふわと笑う莉子に私はゆっくり足を進めた。

急げと心は急かしてくるがまだ暑さの残る時間帯に走つたりできるほどの体力が残つていなかつた。いや、体力というより気力である。

「「」めんね、こんな事に付き合わせて」

莉子に街を案内していたはずなのにいつの間にか落し物探しである。

あらためて考えてみると申し訳ない気持ちが競り上がってきて私は莉子に頭を下げた。

「いえ。わたしも楽しんでますから気にしないで下さい」

「そうなの？」

「はい」

莉子の顔に嘘は見られなかつた。

相変わらず艶やかな黒髪は風に靡いていたし、汗をたくさんかいたはずなのにいい匂いが私の鼻腔を擦る。これがお嬢様との差なのだろうかと意味の無いことを考えて疲れを紛らわす。

つまり莉子は本当に心の底からこのハプニングを楽しんでいるそんな感じがした。

「とりあえず行きますか」

「ええ」

私の目の前に手が差し出される。手を繋ぎましょひつひとのはさすがに分かる。

ただどう反応したらよいかがわからなくて私は困ってしまったのだ。されたことがほとんど無い行為に返し方を知っている人間がいたら見てみたい。

余程間抜けな顔をしていたのだろうか。莉子は私の顔を見るとまた少し笑って、それから自然に私の手を取つた。

「「」じちですよね」

きゅうと手を握られる。それから莉子は道の先を指差した。

その感覚が少しだけ懐かしくて、口の端が緩んでしまった。だつてこんな風に手を握られることなんて幼稚園以来といつていいくらいだと思つ。

莉子の手つて柔らかいし温かい。

別に不思議なことじやない。けれどそんな当たり前のことがとても嬉しかつた。

少し恥ずかしい氣もしたが繋がつた手はそのままにして道を歩くことにする。

「そついえば、あの場所は家から近いんですか？」

ぱりぱりと足を進めていた。

そう言つととても不真面目な印象を受けるかもしけないが自体に一番あつてゐる言葉なのだから仕方がない。

のんびり、ゆっくり、お互いのペースで歩く。それは思つていたより心地よいことだつた。

「私の？」

「はい」

莉子と出会つた場所は通つてゐる高校と家との中間に位置する。そういう意味では近いのかもしれないが、学校が中々に遠い所なのでそことの中間と思つとそつと言いたくなくなるのが正直な気持ちであつた。

「近いつて程じゃないけど、学校からの帰り道にあるから寄りやすいだけかな」

くいつと繋がっている感覚を確かめるかのように引っ張る。

少しだけ子供っぽいような気もしたが考えない。手を繋いでいる時点でいつもの私らしくないことは確定している。友人に見られたら失笑される事請け合いだ。

その点、莉子は大人らしい。私がしたことには付かないはずがないのに何もないような振りをしながらしっかりと反応してくれる。反応といつても手に込められる力が少々変わっているだけなので気のせいかもしない。

「寄り道ですか？」

「時々だけどね」

そんな風にくすぐつたいやり取りを繰り返しながら道を歩いていた。

あの場所に行くのは寄り道としか言いようがない。

人との付き合いが面倒なときにはちょっとだけ逃げ込む場所なのだ。その目的に雑木林であるあそこは適している。人は近寄らないし、ぱっと見て人がいることもわからない。

使い出してから今までの数年は見つかった事はない。

そう考えると莉子があの場所で出会った初めての人物になる。樹から落ちて出会ったという、何とも間抜けな出会いであるがこうして一緒に動くたびに彼女が良い子であるのが分かる。柄にもなく偶然を生んでくれた神様に感謝しても良いくらいだった。

「へー……つてことはあそこに行けば会える可能性があるってことですね?」

可愛い事を聞いてくれる。

そんな風に思うも、別にあそこに行かなくて私と会うことにはいくらでもできる。特に今探している携帯電話さえ見つかれば会う

「…」

ことが難しくたって繋がつていられる。

寄り道する場所とはいっても私がある場所にいることは余り無いのだ。

「会えなくはないだらけで、ケータイが見つかつたらメアド交換するんだし。別にわざわざ来てくれなくて街とかで会えると思うけど」

「あ、そうですよね。うっかりしました」

「そう」

恥ずかしそうに頭を搔く莉子に頷こうとして身体が固まつた。
いきなり歩みを止めたことに莉子は不思議そうな顔で私を見上げる。どうしたんですか?と小首を傾げる姿は可愛らしかったのだが残念な事に今それに触れる余裕は皆無だつた。

いたのだ、私が。

さっぱり、意味が不明だ。

見てしまつた私にしても理解できない。

もしかしてこれが世の中に三人いるというそつくりさんなのかとも思ったがそんな言葉で簡単に形容できるレベルの似た方ではなかつた。まさに瓜二つ。生き別れの双子の妹だといわれても私は素直に信じただろう。いや、むしろその可能性を信じたい。

「あ、れは妹さんですか?」

私の視線を辿つて莉子もその姿を見つけたらしい。

一瞬びっくりとした顔をしてから私を見て、至極もつともな疑問を投げかけてきた。

「ううん。弟はいるけれど、妹もいるなんて聞いたことない

「じゃあ……」

道路を挟んで向こう側の道を歩いている“私”は中学校の制服を着ていた。私が通っていた中学校と同じものだ。その時点で他人の空似なんて可能性はほとんどなくなってしまう。

同じ中学ということは学区が重なっている。

似たような地域に住んでいてこれだけ似ていたらあつという間に噂になるに決まっている。狭い街なのだ。少なくとも子供の顔が商店街の人々に覚えられる程度には。

「莉子、その tapiyo のケータイ、いつから使ってるの？」

「えっと。そうですね、半年くらい前です。思い切って新しい機種に買い換えたんです」

思わず頭を抱えくなつた。

なんてことだ。

私にとっての四年前が莉子にとっての半年前なのだ。つまりここは私のいた時代から三年前くらいになる。通りで駄菓子屋のおばちゃんが中学校に入つたばかりなんていうわけだ。

おばちゃんは間違つていなかつた。間違つていたのは私だつただ。

*

「ビ、ビ'うしたんですか？」

莉子の慌てた言葉が聞こえる。

それでも私は足を止める氣にはならなかつた。いや、止める氣にならなかつたというより止まつてしまつたら一度と歩き出せないような感じがして怖かつたのだ。

繋がつた手はまだ離れていない。

駆け足に近い速さで動いているせいで段々と汗をかいているのは分かつているが柔らかい感触が伝わるその手を離せなくなつてしまつていた。

「ケータイはもういいわ」

考えてみれば莉子と出会つてから携帯電話を弄つた事はなかつた。元からそこまであの機械を弄つている性質でもなく、友人と連絡を取りたい気分でもなかつたからだ。人付き合いが面倒くさいときに携帯電話という機械は果てしなく邪魔なものになる。

「え? なんでですか?」

「たぶん、この世界にはないから」

何も分かつてないぽかんとした表情と疑問が半々の顔を見て苦く笑う。

この場所で見つからない事はほとんど確定してしまつた。もしか

したら普通に落としているのかもしれないけれど、それはそれ。今更探す気にはならない。今向かっている樹の下に落ちていたらそれ以上の事はないのだけれど、きっとそんな都合のよいことはないだろ。

携帯電話を見つけて三年後に帰れるというなら必死に探しもする。でもそんな確証はないし、何となく関係ない気がしている。つまり勘。今必死に樹の下に向かっているのだって、ただ何となくなのだ。

「どうして……」「……」

訝しげな顔で莉子が私を見る。

私はたぶん優しく微笑みかけて彼女の疑問をわざと流した。上手く説明する自信はなかった。それに言いたくもなかった。まだ自分の身に起きた事を信じたくない上、莉子に疑われたら私の気分は奈落まで落ちてしまつだらう。

「私、帰らないといけないみたいで」

「……っ」

小さな、本当に小さな声にならない音が漏れた気がした。こんな短い間であつても少しばかり私のことを気に入ってくれたという事だろうか。

そうだとしたらとても嬉しい。私は莉子のことをかなり気に入っているからだ。

「そり、なんですか」

耳の側を風が通り抜ける。その合間に莉子の声が聞こえた。夏らしい生温い暑さを持つた風にそれでも汗が伝う身体には幾分涼

しぐ感じじる。

「うん」

莉子の声に私はただ頷いた。

それ以外にどういう態度を取つていいのかわからなかつたからだ。

それからしばらく沈黙が続いた。

私は何も話す気になれなかつたし莉子も突然変わつた私の様子に何を口に出していいのか判断できなかつたに違ひない。気まずい沈黙に申し訳なくなる。

木の下に着いて、私はまず自分が落ちたところに近寄つた。

「私が落ちたのっ！」
「はい。」
「で間違いないと 思います」

一応莉子にも尋ねる。どうにも私は寝起きの悪いタイプなので起きた直後の事はあやふやなのだ。それにしては今回のことによく覚えているなど自分で思い、木から落ちるなんて衝撃的な起き方をすればそれも当然かと逆に自分を納得させた。

じつと夏草が曲がつているところを観察してみる。

綺麗な円とは言ひがたい橿円が広がつていた。よく見てみると、木の根やら出つ張つた石やらが草の縁に見え隠れしていてこれが当たつたならば痛かったに違ひない。

幸いな事に草の層は厚く、その心配はなかつたが覚醒直後から痛い目に合わなくて良かつたと私は胸を撫で下ろした。

「ね、私が落ちてきたの見てたの？」

ふと疑問に思つ。

夏草は膝丈を余裕で越えて下手すると腰くらいまではある。私が寝そべればそのまますっぽりと身体が覆われてしまつ。普通に寝ていたとしたら恐らく気づかれることはない。

だが莉子は私が落ちてきてすぐに近寄つてきた。
寝転がつたままぼんやりと空を眺めていた私の耳にするりと飛び込んできた。

それだけで莉子は私が落ちるとじるを見ていたのだらつ、と何となく思つてしまつ。

「ええ、見てました。だからびっくりしたんですね」

その時の事を思い出したのかくすりと莉子は笑う。綺麗に笑う子だなと今更に思つた。莉子の笑顔は小さい花がほこりんだ様で見ていて安心する、というか心が穏やかになるのだ。

ふわふわ笑う姿に少しだけ心が落ち着く気がした。

「どうこう」と。

びつくりはすると思つ。私だつて道を歩いていて木から落ちてくる所を見たらとても驚く。

だけど莉子の反応は驚いただけというわけではなさそうだつた。
驚いただけならばあんなに綺麗に微笑んだりはしないだろう。少なくとも私はしない。気になつて私はくすくす笑いの残滓が未だに残る莉子に首を傾げてみせた。

「だつて、すゞく綺麗に落ちてたんですよ？」
「きれいに？」

綺麗と落下が繋がらない。思いついたのは水泳の種目である飛び

込みだつた。

だが自分がそんな競技的な意味で綺麗な格好で落ちているわけもなく、私は莉子の言う綺麗という表現を捉え損なつていた。

余程不思議そうな顔をしていたのだろうか。私の表情を見て莉子はまたくすぐすと笑い、繋がつていた手に僅かに力を込められる。きゅっと引っ張られる感覺に逆らわずにいると莉子の顔が直ぐ側に来て覗き込まれるような格好になつた。

目の前に広がる顔は綺麗で。

綺麗という言葉は私の落ち方に使われるよつなものではなくて、きつとこういう姿に使われるべきである。そう思つてゐるのに、私が使われるべきと感じた本人は何の衒いもない様子だつた。

「まるでパツと出てきてそのまま落下したみたいに、穏やかな寝顔のままだつたんです」

その言葉に何とも言えない氣分になつた。

褒めてくるつもりなのは分かつてゐる、ただ私は自分のことを信じられるほど自愛ができるタイプではない。莉子の言うように寝たままだつたことを考えてみると随分間抜けな顔をしていたのではないかと心配になつてしまつ。

寝起きに自信が持てる女の子などそういうない。

テレビに出てゐるアイドルだつて朝に突撃を受ければ必死に顔を隠すし、寝起きが悪い人間にしてみれば頭がはつきりしていない時間の間に人と会うこと自体が気を遣うのである。

「……褒められてる気がしない」

だから私は素直に感想を口にした。

少し唇を尖らせて見せたのは、いわゆるポーズという奴だ。本当はそこまで拗ねてもいなければ気にしてないが莉子を見ている

と構いたくなつてしまつて、いつこう余計な行動もとつてしまつた
だ。

「褒めますよー。」

「ほんと?」

少し慌てる姿はこゝにも年下といふ事を表している気がした。

莉子は眞面目で思つてることが直ぐに顔に出てしまう情緒豊かな女の子である。自分の三年前を思い出してみると、どうにも恥ずかしくなつてしまつて考えたくない。

私の三年前ね。

とりあえず、莉子のよひに良い子ではなかつた。それは間違いない。

思春期真つ只中といふやつだ。振り返るにはまだ早い。

私は自分をそつ納得させてから、莉子の様子を伺う。まだ落ち着きを取り戻すには時間が足りなかつたらしい。そわそわしているのが身体全体から見えた。

思つていた通りの反応に私は機嫌よく頬を緩ませて、莉子の名前を呼んだ。

「莉子?」

「はー」

素直に返事をする子。本当に素直で真つ直ぐな綺麗な子。

夏の青い空にその姿はとても映えていて、在りもしない眩しさに目を細める。まるで光に祝福されているかのように見えた。

「私ね、たぶん、三年後くらいに帰つてくると思うのよ」

口が渴いていた。暑さのせいなのか、緊張のせいなのか、はたま

た全然関係のないことなのか。私には分からぬ。

「どうかに行かれるんですか？」

「へー……まあ、ちょっと遠くね」

自分の口から出した言葉に呆れる。嘘も方便とはいついう時に使う言葉なのだろう。この間の国語の授業での先生の声が頭の片隅にでも残っていたようだ。

三年後に帰つてくる、というか、三年後に戻るのだ。戻つた先で出合つたとしても私は今この姿のままだけど、莉子は三年経つて自分と同い年になつていてる。その時の莉子の反応を考えたくない。姿が変わらないなんて何の冗談かと思つだらうし、結果として私が私だと信じてもらえないかも知れない。

どちらにしろ、私は莉子を傷つけることになる。そして私が傷つく可能性も大だ。寂しさに任せて言葉を発するのは、この場で良い事とは到底言えない。

莉子が寂しそうな顔をこちらに向ける。先ほどの明るい表情が雲に隠れてしまつたように、靈む。

いやだ。

そんな顔を見るのは嫌だ、なんて思つ。途轍もなく自分勝手な感情だ。

今から私と莉子は間違いなく遠くになる。距離も、時間も、全てが一回リセットされてしまつようなものだ。それでも彼女は許してくれるだらうか。私は許されるだらうか。

「やべ、なんですか」

「うん」

悲しそうな声に私は頷くしかできなかつた。ソレで、『めん』と謝るのは何か違う気がした。

少しの間、重たい空気が流れる。それは翳る」ことのない暑さと相俟つてとても居心地を悪くさせた。

「でも……また会えますよね？」

莉子の黒髪が風に舞つた。同時に吹かれた草たちが上昇気流に巻き込まれて昇つていく。

私はその一瞬の風の強さに反射的に目を閉じた。そして再び開いた時、飛び込んできたのは 丸くて白い月だった。

とくん、と小さく鼓動が弾んだ。

「え、ええ。きっと、会えるはずよ」

余りにはつきりと目に映つたそれに一瞬気が逸れていた。だが目の前にいる彼女は勿論、そんな事を気にしてなどいなくて、私は少々焦りつつ答えた。

すると莉子は小さくこくりと笑つた。安堵の微笑みに私には見えた。

「それならいいんです。わたしもこの町を離れますから、約束しますよ？」

「三年は長いわよ」

少しだけ困りてしまつ。叶えられるか分からぬ約束をするなりできるほど私は大人ではなかつた。莉子は私の言葉を気にせず、きつぱりとした口調で言い放つ。

「関係ないですし、気は長いほうです」「全く、変なところで強気なのね」

ぐすりと今度は私が微笑む。この町を離れたくなくて泣いていたのに、三年は待てるというのだから不思議な話だ。けれど離れるのが嫌で泣けるのは気持ちが強いからだ。そう考えると三年待つと決めてしまつたら、三年待てる強さを莉子は持つてゐるのかもしない。つまり一言で表せば芯が強いのだ。

じつとこっちを見る莉子へと小指を差し出す。

少し子供っぽいような気もしたが今のわたし達には、この方法が丁度良い。ほんの数時間過ぐただけで三年後の約束を取り決めてしまうよつな”子供”なのだから。

「指きりね」

「嘘吐いたら針千本です」

軽口に軽口が返つてくる。わかっている。莉子は本気だ。この約束を何しても守るだろう」とは目を見れば直ぐに分かつた。三年後、彼女は高校生になつてゐる。中学生の今より行動範囲は広がるだろうし自由も増えるはずだ。

本当に、しつかりした子ね。

それが少しだけ悲しい。だけどそれを口に出すのは間違つてゐる。

「あつ」

小指を絡ませたまま、笑い合つてゐるわたし達。まるで時が止まつたかのようだつた。その時間を動かし始めたのは莉子の何でもない一言だつた。

キラキラ輝く視線が私の頭上を越えて樹へと延びてゐる。

「どうかした?」

私も振り返つて首を上へと反らせる。だがそこに広がるのは青々

とした葉っぱと吸い込まれそうなほど青い空だけだった。何の変哲も無い風景である。

「あそこ、今光りました！」

莉子の指はまっすぐに木の上を、それも中々に高い枝を指していた。この樹には良く登る私でも、あの高さまでは登った事はない。

「ケータイかもしれません」

「え、でも、私が寝ていたのはあそこより低い枝よ？」

「鳥がくわえて引っ掛けたのかも。とりあえず、見てみましょう」

莉子はそう言ひ、「よこしょ」とスカートの裾をまくり出したので、私は慌てて止める。どうも、私と離れることが決まってから彼女は行動的過ぎる。

「私が登るから。莉子はそこで見ていって」

彼女の肩に手を置いて落ち着かせる。僅かに不満そうな瞳が私を見上げたが見ない振りをすることにした。この樹には何回も登っている。初めて登る莉子よりは幾分か安全だろう。それに傷一つない白い肌を傷つけるのは私が嫌だった。

いつものように最初の出っ張りに手をかけ、ぐっと力を込めれば私の身体は直ぐに最初の枝へと届いた。そこからいつもの枝、大体樹の中間の高さまでは時間を掛けずに着くことができた。まるでサルのように身軽に枝を登る私の姿は莉子には素晴らしい運動神経の良い人に見えたらしく、下から羨望の眼差しが投げかけられているのは見なくても分かった。

「さてと」

「ここからが勝負だ、と私はまだ頭上にある枝へと視線を向ける。

下から見た時は分からなかつたが確かに光を反射しているものがあるようだつた。あれを見つけられるのだから莉子はきっと凄く視力が良いのだろう。

「届くかしら？」

いつも脅威をさせて貰つてゐる枝からまた登る。ある程度の高さになると枝 자체が細くなり、私の体重をさせることは無理そうだ。問題の枝はもう直ぐそこまで迫つていた。後、一段か二段登れば間違いなく手が届く。

そして見るからに私の体重を支えられなそつな枝が目の前にはあつた。距離としては微妙な所である。目の前の細めの枝を握つて、上半身だけを伸ばせば何とか光まで届くだろうか。

全体重を掛ければその瞬間にポキリと折れる事は明白だつた。そうなると何処まで力を入れて腕を伸ばせるかだ。

「無理しないで下さいねっ」

下からは心配そうな声が聞こえていた。真上から見る莉子の姿は小さく見えて、最初木の枝の上から彼女を見つけていればこう見えたのかもしれないと思わせた。

「大丈夫。もう少しだから」

ぐつと手を伸ばす。指先が触れるまで数センチだ。

もう少し、と枝を握る手に力を入れて上半身を持ち上げる。あまり使われることの無い筋肉が軋んだ。これは明日筋肉痛になるわねと口の中でぼやく。

限界まで伸ばしたその指先に硬質なものが触れた。それと同時に枝に乗つていたものがバランスを崩し転がり落ちる。私は反射的にその落下地点へと手を伸ばし、落ちてくるものを受け止めた。

「とつと、危ない、危ない」

パシンと乾いた音とともに掌が叩かれる。零さないよう握ったそれは間違いない私の携帯電話で諦めていたものが戻ってきた嬉しさに顔が綻ぶ。これで莉子と連絡先を交換すことができる こんな場所にあつたのは鳥でも運んだのだろう。

そんな風に気を緩めたのが良くなかった。
脱力した身体は重くなる。寝ている人間が普通に背負うよりも重いのもそのせいらしい。

そして今、私は一本の枝に分散させていた体重を足元の一本だけにかけ、その上、手に舞い戻ってきた携帯電話に頬を緩めていた。つまり弱っていた足元の枝が折れるには充分な体重が一気に掛かつたことになる。

バキンッ。

聞こえた音は思つていたより軽かつた。

「え？」
「危ない！」

間抜けな私の声と、切羽詰つた莉子の声。

その両方が私の耳に入り枝が折れたことを理解する。急変化する視界が妙にゆっくりに移つていった。まず目に鮮やかな緑と枝のくすんだ茶色、それから最早支えるものの無い足元を見れば折れた枝の影に莉子の姿がはつきりと見えた。

そうだ、莉子は私の真下にいた。このままでは彼女まで枝にぶつかってしまう。

咄嗟に頭に浮んだのは自分の心配ではなくて莉子の心配だった。
私は一度この樹から落ちてはいるから、それほどの大怪我になるとは考え辛かつたのだ。

「莉子っ」

ぐんぐんと地面との距離が、莉子との距離が近づく。それでも体感時間は長かった。たかが数メートルの落下にしては、随分と長く、数秒はあつた気がする。

莉子がその細い腕を広げた。私を受け止めようとしてくれているのは歴然だったが、この場合には褒められた事ではない。私のことなど構わず逃げてくれて方が良かつた。しかしそれを心優しい彼女に求める事が誤りだったのだ。

段々と莉子と私の距離が近くなり　　ぶつかつた。

聞こえたのは「トサツ」という思つたより軽い音だつた。人にぶつかつた筈なのに、いや、あの場所から落ちたにしては衝撃がなさ過ぎる。

私は恐る恐る閉じていた瞳を開け状況を確認した。
広がる夏草の縁に変わりはない。そして誰かを下敷きにしている
感覚も無かつた。

「……莉子？」

地面についていた手を動かす。片手には硬質な、それでいて馴染んだ携帯電話の感触、もう片方には生命力に溢れた夏草の感触あの柔らかくて温かいものは何処にもなかつた。

辺りを見回してみても、まるで何もなかつたかのようにただ蝉の鳴き声だけが響いていた。

もどつて、きた？

ばつと上を見上げる。そこには確かに私が掛けた毛布が風に靡いていた。じわりと今更ながら落下の恐怖による汗が滲み背筋を冷やした。だけどそれより怖かつた、悲しかつたのは莉子がいないことだつた。

唐突に三年前にいた私は、唐突に三年後に戻つてきたのだ。

折角、ケータイが戻ってきて莉子と連絡先を交換できるはずだつたのに。どうやら、余程空氣の読めないものによる仕業らしい。ぶつぶつと文句を言いつつ立ち上がる。草を払い、用済みになつたケータイをポケットの中に突っ込んだ。

イラついて握つたせいで、くしゃくしゃになつてしまつた髪を優しく吹く風が宥めるように撫でていつた。相変わらず空に浮ぶ月は

飄々としていて、私はまるで仇のように睨んでしまう。

莉子に、会いたい。もう一度だけ会って、わたし達を始めたい。
叶わぬ夢に背中を丸めて幹に寄りかかる。三年の月日があのうつと、
この樹は何も変わっていない。

「間が悪すぎるわ、全く」

ぽつりと呟いた一言は墨さの中に溶けて、私は一人を知る はずだった。

「そうでもありませんよ?」「え」

涼やかな声が耳朶を打った。少し大人びた”それ”はつい先ほどまで聞いていたものに違いかつた。私は信じられない気持ちを抑えて声のした方へと振り向く。心臓が人生で初めてというほどの速さで動いて落ち着かなかつた。

「これ、忘れ物です」

手渡されたのは私の鞄。気に登る時に邪魔だからと幹の側に置いていたものだ。

伸ばされた手から鞄を受け取り、そのまま身体、顔と視線を動かす。たどり着いた先にあつたのは見慣れたものとは少し違う、それでも見たかつた人のものに違いかつた。

受け取つた鞄がそのまま地面に落ちる この時の私の顔はとても間抜けなものだつたに違ひない。だつて、目の前の莉子の顔がとてもおかしそうに笑つているのだから。

「り、こ?」

信じられない気持ちで田の前の顔を見つめる。じっと見つめすぎて、下手したら穴が開く可能性があるくらい見つめていた。
そんな私の不躾な視線を莉子は少しも気にせず、ただ微笑んでいる。

「はい」

「え、なんで」

聞きたい事も言いたい事もたくさんあった。たくさんありますので、私の中で渋滞を起こしてしまっていた。きちんとした文章として言葉を成すには僅かなりとも時間が必要だった。

莉子は不思議そうに首を傾げると、まるで今いることが普通だというように言った。

「何でって、約束したじゃないですか。指きり忘れちゃったんですね
か?」「あ」

三年、経つたのだ。それはつまり約束の年月が過ぎ去った事を意味している。あの時、場所についての取り決めは無かつたから莉子がここに来ることに何ら不思議はなく、むしろ真面目な彼女の性格を考えると、きっと約束を守ることは分かりきった事だらう。ゆびきり、と小さく呟いた私に莉子はふわりと微笑んだ。
ついでつきまで一緒にいた彼女より大人びた表情で、綺麗に微笑んだ。

その顔が三年の月日をはっきりと感じさせた。

「三年、経つたのね」

自分に時の流れを認識させるより、事態を飲み込ませるために、私は自然と呟いていた。

「そうですよ」

まだ信じられない私に対して、莉子はとても普通に物事を受け止めていた。三年といつも月日を通り過ぎてきた莉子と刹那に三年前が詰め込まれた私。その一人の間に認識の違いが出るのは当たり前といえば当たり前かもしね。

「急に消えて、『ごめんね?』

「本当に驚きました。すぐ探ししたんですよ?」

莉子にどう見えたかまでは知らないけれど、とても唐突で急激な変化だったのは間違いないだろう。町を離れる彼女に、唐突に消えた人間というのはショックなことだったのではないだろうか。分からぬ。それでも申し訳ないとは思っていた。

顔を伏せ、謝る私の手にポケットの膨らみが触れた。あ、とそこに入っている存在を思い出す。これも別れる前に莉子に渡そうと思つていたのだが携帯電話のせいで忘れていたのだ。

「でも約束のおかげで会えました。知つてたんですね、三年後から来た事……『うん、あの時に気付いたことですよね。だから、急に様子が変わつて、あの場所に戻つたんでしょう?』」

びっくりした。莉子の言う事は一つも間違つていなくて、まるで私の考えが読めていたかのようだつた。頭の良さそうな子だなと最初に思ったのは間違つていなかつた。

だけど。

そう、大体はあつている。でも肝心の部分を気付いていない。

「そうね。知つてたから約束した。それは間違つてないわ」

私はポケットから袋を取り出す。あの時は「こんな事になるなんて少しも思つていなかつたので、本当にやつぱりとした普通の袋だつた。もう少し飾りつけでもらえれば良かったかなと苦笑する。

今更後悔した所でいいじゃないもない。私はそれを素直に莉子に手渡した。

「これは？」

「莉子にあげよつと思つて貰つたんだけど、三年越しになつちゃつたわね」

開けてみて?と言えば莉子は少し驚いた様子で恐る恐る手を動かす。中から出てきたのは何の変哲も無いアクセサリーで、でも私が莉子にと選んだものに間違いなかつた。

「これ……いいんですか?」

莉子の視線が指輪と私を行き来する。きょのきょのする様子が三年前と重なつて微笑ましい。

「良いも悪くも莉子に買つたんだもん。遅くなつて」「めんね」

私が申し訳なさそうにやつぱつと莉子はふんふんと頭を横に振つて、ぎゅっと指輪を入つていた袋」と抱きしめた。三年経つて同じくらいになつた身長は、だけど未だに私の方が高じよつて髪の間から覗き見えるその耳は赤くなつていて可愛かつた。

「気に入つてくれた?」

「はい。ありがとうございます」

笑うと華が咲くよう、なんて、言える人の正気がしれないと思つていた。だけど、今なら私はその人に共感できる気がする。流石に口に出す事はできなけれど、莉子の笑顔は本当に、華が咲いたように私には感じられた。

それでね、と口に出そうとして何を続けたかは分からなくなつてしまつ。言わなければならぬことは、言いたいことは中々な量があつたはずなのに。

きっと、目の前で笑う彼女のせいで色々なことが頭から飛んでしまつたのだ。

「そ、れでね。莉子。私が約束したのは、何も知つていたからだけじゃないわよ」

喉に引っ掛けてしまった言葉を蹴り出すように私は喋つた。そうしないと何時までも莉子に伝えたいことが伝わらない気がした。

「莉子に、会いたかったから、約束したの」

あの約束は再開の約束だ。

三年という月日が一人を隔ててしまつても、私は莉子に逢いたいと思つていたし、莉子もそう思つてくれたからこそ成された約束だと思っている。

だから私は、私が指切りをした一番の肝心な事は　きっと彼女に会いたかった事なのだ。それをただ私が三年後に戻るからという理由だけにされてしまつては堪らない。

この時の私の感情を形にすればきっとこうなる。

「だから、会えることが重要なんじゃないの。逢いたいって思つて

来てくれたことが私は嬉しい

口に出してから、あれ、これってかなり恥ずかしいことを言つて
るんじやないかしら、と思つたけれど勢いづいた言葉は途中で止ま
りはしない。目の前の莉子の顔が赤くなるのを見ながら、きっと自
分も同じくらい照れた顔をしているのだろうなと感想を持った。

「……ほんと、あなたは、わたしがびっくりすることばかり、しま
すね」

「最初に驚かされたのは私よ？だつていきなり泣き出すんだもの」

「それはわたしも一緒です。木から落ちてきたんですから」

莉子の言葉にそれもそつかと素直に納得する。

彼女にしてみれば自分は木から落ちてきた人だろうし、その後木
から落ちるようにして消えてしまつた人である。私だつたら絶対夢
でも見たかと思つて信じない。

「それにしても、本当に良く来てくれたわ。私つてかなり怪しい人
なんじやないかしら」

たとえ鞄が残つていたとしても、それはそれで不気味だし、私は
二度とこの場所に来なくなつてしまふだろう。だけど莉子はまるで
私がここにいることが当たり前のように約束を守つてくれた。それ
は唐突に消えた人と対した人物の対応ではなくて、丸きり普通の人
との約束のようだ。

「鞄がありましたし、何より怪しくても何でも、もう一度会いたか
つたから」

え、と顔を上げると莉子の顔はさつきより更に真っ赤になつてい

た。

私もかなり恥ずかしいことを言つたつもりだが、これには適わない恥ずかしいに可憐さが足されたら無敵になるのだと私はこの時に知つた。

「考えてみると、わたし、あなたのこと、何も知らないなあつて思つたんです。名前さえ知らなくて」

「そうだったかしら？」

言われてみればそうかもしだい。莉子の名前を聞いたのは慰めてる最中だつた為、私が自己紹介をする場面はなくなつてしまつたのだ。町を回るにしても不便はなかつた。

「そうです。だから、せめて、名前くらい知りたいなあつて」

名前。確かに、人間関係で最初に交換すべき情報だ。むしろそれを交換していなかつたわたし達の方が珍しい。少ない時間とはいえ、ずっと一緒に行動していたのだから。

頬を染める莉子は可愛かつたし、彼女の希望も最もである。名前を交換したいなら今すぐにでもする。それとは別に私の中には不満に近いものがくすぶつていた。

「名前だけでいいの？」

私はもつと、色んなこと、色々な莉子を知りたいわ。それに知つて欲しい

不満はすぐに口から飛び出て行つた。この堪え性が無い所も友人にはよく注意される。今度から気をつけようと頭の隅で考えていると、目の前で莉子が目を真ん丸くしていた。

「いいん、ですか？」

「良いも何も、その為の約束でしょ」

似たような問答をわざわざもしたと思つて私は少しおかしくなつた。くすりと小さな笑いが口端から零れる。

この子は私と一回会つただけで約束は守つたと離れる気だつたのだろうか。少なくとも私は再会できた時間から続きを求める気持ちがあつた。離れなければならぬ定めだつたのならば、再開する運命を作るだけなのだから。

「やうね。やっぱり、最初は名前にしましょうか

これからすることは山ほどある。まず連絡先の交換をして、三年前はできなかつた街中を巡つて歩いて、今度こそゲーセンに行つてプリクラを取るのもいいかもしない。頭の中で予定を組み立てる私に莉子はふつと笑顔を零して、瞳の端に浮んでいた雫を拭つた。

「結局、そこに戻るんですね」

「いいのよ。名前は大切でしょ？ね、莉子」

「そうですね。わたしも、あなたのことを名前で呼びたいです」

私は大きく息を吸つた。これが最初の一歩、私と莉子の人間関係の始まりなのだから。不思議な出会いをした年下で同じ年の彼女との。

「私の名前は　」

田の前には大きな月が出ていた。丸くて白い、大きな月が。真昼に顔を出すそれは二年前も、今も、落ちる前も、落ちてからも、同じ顔で浮んでいた。

それに重なるように莉子は涙混じりに、でも微笑んでくれていた。

改めまして、江川なつむです。

真面目の月を読んでください、本当にありがとうございます。
そして、わざわざ後書きにまで田を通してくださいるなんて、あなた
は良い人です！

二次で話を書くことはあってもオリジナルを書くのは初めてだった
ので色々ばたばたしている箇所もあります。
でも完結しました。

今はその事にほっと胸を撫で下ろします。
自分、完結させることが苦手なもので、最後の一話でいつも詰ま
りてしまします。

最早習性の様なものなのかなと思いつつ、悪癖には変わりないので
直したいと望む日々です。

ですが読者さまがいることに感激して、お気に入り登録されている
ことに狂喜して完結させました。

本当に応援ありがとうございましたーこの話が完走できたのは読者
様のおかげです。

本当はもっと早く投稿できる予定だったのですが、結局年末になっ
てしましました。

まだまだ、書きたい話はあるので（女の子の話ばかりですが）これ
からも気が向いたら見てやってください。
では後書きでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7760m/>

真昼の月

2011年3月28日14時57分発行